

声調の誕生

中国からインドシナ半島にかけて、南亜語族のクメール語などと、ミャオ・ヤオ語、それにチャム語やスマトラから伝わったマレイ語などの南島語族の言葉を除き、すべての言語が声調を持ち単音節語からなる単音節声調言語となっています。声調とは単音節の単語中で一定の音高または上昇や下降などの変化があるものを言います。ここでは声調とその発生について論じたいと思います。

中国語では声調を四声と言いますが、昔の四声と今の四声は違うものです。「四声」は南北朝時代に沈約によって確認され、平声、上声、去声、入声の4種あり、最後の入声は内破音（語末の-pなどを破裂させず口の形を保って閉鎖するもの）で終わるものです。過去の四声の音高についてはよくわかってはいませんが、唐に留学した空海は『文鏡秘府論』（804年）で「平聲哀而安、上聲厲而舉、去聲清而遠、入聲直而促」と、同じく留学僧である円仁の弟子安然は『悉曇藏』（880年）で「平聲直低、有輕有重。上聲直昂、有輕無重。去聲稍引、無輕無重。入聲徑止、無内無外。平中怒聲、與重無別。上中重音、與去不分。」と述べています。漢詩の平仄は平声以外が仄声です。一行五字で四行からなる五言絶句や一行七字で八行からなる七言律詩など唐代の近体詩では平仄それぞれの字を規則的に配置して押韻していました。音声が変わってしまった後代の漢詩人や異国の漢学者は韻を丸暗記しなければならず大変だったでしょう。

元来、語頭の濁音は低めに、清音は高めに発音されていましたが、時が進むにつれて音高の違いが意識され濁音の陽調と清音の陰調が区別されて四声八調となっていきました。広東語など南方の方言では今も八種前後の声調を保持していますが、普通話では合併して四つになってしまいました。北京官話では、(b-、d-、g-など)語頭の全濁音が元代には消滅します。この清濁の別の解消の補償として陽陰の区別が生じたわけです。また入声韻尾 -p、-t、-k が次第に失われていき、さらに清代には鼻音韻尾 -m が -n に合流し、また ki-や hi-が口蓋化して ji-や xi-に変わっていき、現代音に近づいていきます。

昔の四声と普通話の四声の関係を唇音を例にとって見てみましょう。

(陰平＝一声、陽平＝二声、陰上＝三声、去声＝四声)

	pa- 全清	pha- 次清	ba- 全濁	ma- 次濁
平声	pa- 陰平	pha- 陰平	pha- 陽平	ma- 陽平
上声	pa- 陰上	pha- 陰上	pa- 去声	ma- 陰上
去声	pa- 去声	pha- 去声	pa- 去声	ma- 去声
入声	pa- 無規則	pha- 無規則	pa- 陽平	ma- 去声

ベトナム語は、二十世紀半ばまで、タイ語の仲間なのか、それともクメール（カンボジア）語など南亜 Austroasian 語族に所属するのか論争が続いていました。大量の漢語を除いた基本語彙に南亜諸語に対応するものとタイ語に対応するものが沢山あったためです。ベトナム語は中国語やタイ語と同じ単音節声調言語ですが、南亜諸語は声調がなく複音節語を沢山含んでいます。（南亜語族の言語を話す民族は12世紀頃までインドシナ半島の主人公でした。カンボジア王国は最盛期にはメコン・デルタからラオス・タイ・マレイ半島まで版図を広げ、一方それと近縁のモン人は4世紀までに中部タイに伝説上のスワンナブーミ王国、7世紀に同じく中部タイにドヴァーラワティ王国を、8世紀には北部タイにハリプンチャイ王国を建て、また4世紀にビルマ南部にタトン王国を、13世紀には同じくペグー王国を建て、これは断続的に18世紀まで続きました。モン人は現在は大部分がタイ人・ビルマ人と融合したと思われませんが、ビルマ中東部ではタライン人として生き残っています。クメールとモンはそれぞれタイ文化およびビルマ文化の礎となったと考えられます。）

ベトナム語とクメール語で対応すると思われる単語の例を挙げると：

一 *một* – *muy*、三 *ba* – *bei*、四 *bốn* – *buon*、五 *năm* – *pram*、母 *mẹ* – *mai*、子 *con* – *kon*、顔 *mặt* – *moat*、手 *tay* – *day*、足 *chân* – *cheung*、骨 *xương* – *ch'ung*、髪 *tóc* – *sok*、頸 *cổ* – *ka*、胃 *bụng* – *pung*、日 *ngày* – *ngay*、年 *năm* – *chhnam*。

ベトナム語とタイ語の対応例としては：

淑女 *nàng* – *naañ*、象牙 *ngà* – *naa*、暗い *mù* – *mvă*、タロ芋 *môn* – *pạn*、筏 *bè* – *bee*、田圃 *rẫy* – *rai*¹、パン *bánh* – *peen*²、下 *dây* – *tai*²、腹 *bụng* – *buñ*、鉤 *ngạnh* – *nie⁻yn*¹。

二十世紀前半のフランスの東洋学の泰東 *Henri Maspero* は声調が語族の分類にとって重要な指標であるとしてベトナム語はタイ語族であると主張しましたが、同じくフランスの *André-Georges Haudricourt* は1953年刊行の *De l'origine des tons en Viêtnameien* などでモン・クメール語の頭子音や末子音とベトナム語の声調の関係を詳細に分析して、モン・クメール語からベトナム語への単語の変化を明らかにし、南亜語族であることを主張しました。

彼によれば、8世紀頃には末子音に応じて平声、上声、去声/入声の3種に分かれていたものが、15世紀までのある段階で濁音の清音化が起り、濁音と清音が区別できなくなったため、その補償として声調がそれぞれ二つに分かれたものとされています。ただし、モン・クメール語は基本的に2音節語であり、主音節（第二音節）にアクセントが置かれ第一音節の母音が弱化していわゆる1.5音節ができ、やがてこの母音が脱落します。声調の二分化に関するものは、分化後には消えてしまう第一音節の子音（次表にsで例示）です。現在のベトナム語には *b*、*d*(*d*)、*d*(*z*)、*gi*(*z*)、*g*/*gh*(*γ*)などの濁音が残っていますが、これは弱化した主音節の子音だそうです。

モン・クメール語末	古越南語	頭子音	変化典型		現代ベトナム語
-Ø 母音・鼻音	-Ø	清音	<i>pa</i> → <i>pa</i> → <i>ba</i>	<i>sla</i> → <i>ɺa</i> → <i>la</i>	1 thanh ngang 平声 33 a 陰平
		濁音	<i>ba</i> → <i>ba</i> → <i>bà</i>	<i>la</i> → <i>la</i> → <i>là</i>	2 thanh huyền 玄声 31 à 陽平
-s、-h 摩擦音	-h	清音	<i>pas</i> → <i>pà</i> → <i>bả</i>	<i>slas</i> → <i>ɺà</i> → <i>lả</i>	4 thanh hỏi 問声 313 á 陰上
		濁音	<i>bas</i> → <i>bà</i> → <i>bã</i>	<i>las</i> → <i>là</i> → <i>lã</i>	5 thanh ngã 跌声 324 ã 陽上
-ʔ 塞音・内破音	-ʔ、-p など	清音	<i>paʔ</i> → <i>pá</i> → <i>bá</i>	<i>slaʔ</i> → <i>ɺá</i> → <i>lá</i>	3 thanh sắc 鋭声 345 á 陰去/陰入
		濁音	<i>baʔ</i> → <i>bá</i> → <i>bạ</i>	<i>laʔ</i> → <i>lá</i> → <i>lạ</i>	6 thanh nặng 重声 21 ạ 陽去/陽入

なお、ベトナムでは朝鮮などと同じく公文書では漢文を用いてきましたが、日本の国字と同じく漢字の構成原理を利用したチュノム（字喃）が作成され、15世紀以降は漢字・字喃混じり文として盛んに使用されました。字喃は意味を表す偏と発音を表す旁を組み合わせたものです。例えば、女偏の右に美を添えて（媿）母の意味の *mẹ* を表しました。年 *năm* は南の右に年（辭）と書きます。しかし、より正確な発音がわかるのは、フランス人イエズス会宣教師の *Alexandre de Rhodes* が1651年に出版した *Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum* 以降です（当時はまだ二重頭子音 *bl*、*tl*、*ml*が残っていました）。因みに *Rhodes* がこの辞書で採用したローマ字表記が現在の表記法チュ・クオック・グー（字國語）の元になっています。

ベトナム語に入った漢字語は漢越語と呼ばれていますが、もちろん日本の音読みなどと似ています。例えば、ベトナム社会主義共和国は *Cộng Hoà Xã Hội Chủ Nghĩa Việt Nam*（共和社会主義越南）と言います（xはs音）。ベトナム語は多くの東南アジア言語と同じく修飾語が被修飾語の後ろに来るので、字順は変わっていません。

ただし、一部の音が変化して似つかない音になっているものもあります。

頭子音で、唇音が舌音に変わっているもの：比 *tỉ*、並 *tĩnh*、匹 *thất*、偏 *thiên*、民 *dân*

逆に舌音が唇音になっているもの：扇 *phiến*

頭子音なしが鼻音になっているもの：一 *nhất*、因 *nhân*

ベトナム語が非声調言語から声調言語に変わったというのは理論的な推測ですが、実際に変わったことが確認できる言葉があります。マレー語の仲間である南島語族のチャム語です。

ベトナム中部海岸に2世紀末から19世紀にかけて千六百年以上も続いたチャンパ王国という国がありました。漢籍では2世紀以降に林邑、7世紀以降は崑崙、次いで占城という名前が出てきます。海上交通の要所にできた港湾都市を中心とするいわゆる「港市国家」の一つです。中国文化に続いてインド文化を採り入れ、7世紀ごろからインド系文字による碑文を大量に残しています。（日本との関わりでは、734年に帰国途上の遣唐使判官平群広成の乗る船が崑崙国に漂着し都に暫く抑留されたとの記録があります。また736年に唐から林邑僧の仏哲が来日して雅楽の一種である林邑楽を伝え、それ専門の楽師が置かれて百年後の平安初期にも演奏されたと伝えられています。）

中部海岸の北から順に、広南クワンナム省の古都順化フエ近郊のカンダプルブラ、同省のダナン近郊のインドラブラ、日本人町である会安ホイアンの上流で美山ミーソン遺跡の近くの同省チャキエウにあったシンハブラ、平定ビンディン省で帰仁クイニョンを外港とするヴィジャヤ、ニャチャンのカウハタ、ファンラン（パンドゥランガ）のヤンプナガラ、寧順ニントゥアン省寧福ニフォックのヴィラプラの各都市が、特にヴィジャヤとファンランがその中心でした。

唐が衰微し滅亡した10世紀以降に中国から独立したベトナムの南進を受けて、和戦を繰り返しながらも次第に南方に後退して行き、1471年に首都ヴィジャヤの陥落後、南部でファンラン王朝がベトナムの属国として続きます。

宋代の十世紀末以降、何度かにわたってチャンパ人がベトナムの侵攻を逃れて海南島の儋州などに亡命してきたという記事が宋史にもあり、その後裔が海南島の三亚市回輝、以前の三亚回族自治州に現存し、回輝 *Tsat* 語を話しています。（チャンパ人はイスラム教徒なので中国では回族と呼ばれますが、寧夏回族自治区など中央アジア・西アジアからの商人などの後裔である他の地区の回族とは民族的に異なります。マレーシアのアブドラ元首相 *Abdullah bin Ahmad Badawi* の外祖父哈蘇璋は三亚出身のムスリムだそうです。）回輝語は周囲の漢語やタイ系の黎一語の影響を受けて単音節声調言語になっていますが、チャム語の後裔であることは明らかです。その声調化の過程は次のように考えられています。幾つかの単語の対応関係は以下の通りです。

原チャム末尾音	頭子音清濁	回輝語声調	原チャム	西チャム	回輝語	
-h	清音	55	<i>pisah</i>	<i>pacah</i>	<i>tsa55</i>	壊れた
	濁音	55	<i>pluh</i>	<i>pluh</i>	<i>piu55</i>	十
glottal	清音	24	<i>dadit</i>	<i>tadi?</i>	<i>thi42</i>	扇
	濁音	42	<i>anak</i>	<i>anə?</i>	<i>na?24</i>	子供
濁音	清音	33	<i>lanjit</i>	<i>lanji?</i>	<i>lɔi?24</i>	空
	濁音	11				

チャム人は今も、本拠地であったファンラン付近などベトナム中南部（東チャム）、カンボジア（西チャム）にそれぞれ約20万人いると言われています。また山地チャム人と総称されチャムと歴史的・文化的伝統を共にし類似の言語を話すジャライ人、ラデ(エデ)人、ラグライ人が中部高原にそれぞれ10~20万人ほど住んでいま

す。チャム語はスマトラ島西北端のアチェ語と最も近いとされ、15世紀後半ヴィジャヤの陥落時にチャンパ王子がアチェに移住してスルタン国を建てたとの伝説も残っています。

タイ語には中部の標準語で5種の声調がありますが、声調と声調符号（無符号を含めて5種）の関係がとても複雑になっています。タイ文字は丸みがかかった当時のクメル文字に基づいて13世紀末に作られたもので、東南アジアのインド系諸文字と同じく南インドのパッラヴァ文字に由来するとされています。声調記号を世界で最初に考案し、また複数の子音が連続する子音群を縦書きから横書きに改めたことが特筆されます。現在のタイ語には濁音はなく、濁音に相当する文字も清音で読まれます。例えば、唇音系列で **p**、**ph**、**m** はそのまま発音しますが、**b** 字と **bh** 字は **ph** と発音します。文字作成時のタイ語は濁音を持ち、平声（無符号）、去声（第一声調符号 **mai ek**）、上声（第二声調符号 **mai tho**）の三種の声調があったが、濁音消失後にそれぞれの声調が二分して6種となり、後に標準語では二つが合体して5種になったとの説がありますが、濁音字を清音で読むことや、声調と声調符号の関係を説明できるので魅力的です。タイ語が属するタイ・カダイ語族は、中国西南部からインドシナ半島にかけて分布し、北東は湖南・貴州省界で話されるカム（侗）語から、西はかつてインドのアッサム州で話されていたアホーム語まで広い範囲に及んでいます。いずれも河畔に住む稲作民です。（タイ族は紀元前に華中の湖南・湖北・江西界限や華南の浙江・福建・広東・広西一帯に住んでいた越人の後裔と考えられ、インドシナへは比較的最近の約千年前に雲南省から広がったようです。紀元前六世紀に湖北省で聞かれたものを漢字で音訳したという「越人歌」が伝わっています。）タイ・カダイ語族の中には濁音のない言語もありますが、ラオ語や広西省のチュワン語のように濁音の残っている言葉もあります。もちろん、基本的に声調言語です。

チベット語も単音節声調言語ですが、7世紀にチベットを統一した吐蕃王ソンツェン・ガンポのときインドに派遣したソンミ・サンボータが北インドの文字を参考にしてチベット文字を作ったと伝えられ、当時の綴りが今も使われていて、大量の書物が残っており、敦煌・トルファン文書にも唐代当時のチベット語写本が残っています。また、チベットでは仏典をサンスクリットから逐語的に翻訳するために対訳辞書『翻訳名義大集 (Mahāvvyutpatti)』や詳細な翻訳規則を作って九世紀前半には集団的に翻訳事業を進め、その訳文は非常に人工的なものとはいえチベット語訳からサンスクリット原文がほぼ完全に復元できると言われるほどでした。（余談ですが、チベットの支配者は、吐蕃王国もサキヤ派もそれに続くパクモドゥ派もみな先祖が天から降臨したという天孫神話を持っています。）

チベット文字の構成は複雑で、前置字 (**g d b m ' r l s**) : 母音記号, 上接字 (**r l s**), 基字, 下接字 (**w ' y r l**) : 母音記号 : 後置字 (**g n g d n b m ' r l s**) : 再後置字 (**s**) からできています。例を見てみましょう。

བསྒྲུབ་པ་ bsgrobs

これで一字の音節文字です。最初の要素が前置字 **b**、二番目の群のうち上から母音記号 **o**、上接字 **s**、基字 **g**、下接字 **r**、次の要素が後置字 **b**、最後が再後置字 **s** となります。母音 **o** は基字群の核子音 **sgr** の後に付きます。母音記号は、**a** は基字に含まれているので無記号、**i e o** が基字の上に、**u** は下に付きます。今のラサ標準語の発音は [tʂop] (藏語拼音: **zhop**, 拉萨音拼音: **zhopv**) です。頭子音群、とりわけ基字の清濁によって声調の高低が決まり、尾子音群に応じて声調が高平調から高降調にまたは低平調から低昇降調に変化し、かつ母音がウムラウト化します。つまりかなり複雑ではあるものの、綴り字によって発音が規則的に決まります。

チベット語の固有名詞をいくつか挙げておきましょう：ラサ **lha sa**、ポタラ宮 **pho brang potala**、ノル布林カ離宮 **nor bu gling ka**、ガンデン寺 **dga' ldan**、セラ寺 **se ra**、デプン寺 **'bras spungs**、シガツェ **gzhis ka rtse**、タシルンポ寺 **bkra shis lhun po**、ギャンツェ **rgyal rtse**、カイラス山 (カン・リンポチェ)、**gangs rin po che**、

エベレスト山 (チョモランマ) jo mo glang ma、ヤルンツァン^ポ河 yar klungs gtsang po、ヤルルン河 yarlung、吐蕃 bod chen po、ユンブラカン宮殿 yum bu bla sgang、ソンツェン・ガン^ポ王 srong btsan sgam po、サキヤ派 sa skya pa、帝師パスパ (ドグン・チューギェン・パクパ) gro mgon chos rgyal 'phags pa、ゲルク派 dge lugs pa、ツオンカパ tsong kha pa 実名ロサン・タクパ blo bzang grags pa、ダライ・ラマ taa la'i bla ma、14世実名テンジン・ギャツォ bstan 'dzin rgya mtsho、パンチェン・ラマ pan chen bla ma、10世実名ロサン・ティンレー・ルンドゥブ・チューキ・ギャルツェン blo bzang phrin las lhun grub chos kyi rgyal mtshan。

7世紀当時には文字の通りに発音され、声調はなかったと考えられています。ラサ語では核子音の清濁でまず高調と低調に分かれ、その後に濁音が清音の有気音に変わったとされています。この他、語末子音の種類によって降調が生じ、現在は高平調、高降調、低昇調（低平調）、低昇降調の四種になっています。

古代	pa	pha	ba	ma
中期	pā	phā	bá	má
現在	pā	phā	phá	má

チベットは伝統的に、ラサを中心とするチベット自治区東部の衛ウー dbus とシガツェを中心とする自治区西部の蔵ツァン gtsang；青海省と甘肅省西南部の甘南蔵族自治区・天祝蔵族自治県、四川省西北部の阿壩蔵族羌族自治州を含む安多アムド a-mdo；チベット自治区東部の昌都地区、四川省西半分の甘孜蔵族自治州（両方で元の西康省）、雲南省西北部の迪慶デチェン蔵族自治州からなる康カム khams に三分され、言語もラサ方言を含むウーツァン方言と、カム方言、アムド方言の三つに大別されます。アムド方言は古代語の面影を留め、複子音を保存し声調はないそうです。

チベット・ビルマ語派には、チベット語とブータンのゾンカ語やビルマ語の他に、湖北・湖南・四川・貴州省境の土家語、四川省の羌語（西夏語もその仲間）、雲南省の彝口語（南詔国を建国）、白語（大理国を建国、旧称民家）、ビルマのカチン＝ジンポー語、チン語、カレン語、インドは旧アッサム州に当たるマニプル州のマニプル（メイティ）語、ミゾラム州のミゾ（ルシャイ）語、ナガランド州のナガ語、トリプラ州のトリプラ（コクパラ）語、それにネパールの旧支配民族ネワール人のネワール語などがあります。その大部分（白語とカレン語を除く）は漢語や東南アジアの多くの言語と異なり、日本語と同じSOVの語順を取ります。ただし、日本語と異なり、修飾語は被修飾語の後にきます。多くのものに声調があるそうです。

驃ピュー人が紀元前二世紀頃からイラワディ（エーヤワディー）河流域にタイエーキッタヤー（シュリークシェートラ）やベイッタノー（ヴィシュヌ）、ハリンなどの都市国家を築き、八世紀半ばから南詔の侵略に曝されて次世紀に衰退するまで栄えました。ピュー語も碑文が残っており、チベット・ビルマ語派とされていますが、完全には解読されていません。

ビルマ人は九世紀に雲南から（南詔の尖兵としてとの説あり）南下してビルマの地に入り、11世紀にはパガン王国を建てますが、モン文字またはピュー文字をもとにして11世紀後半に丸っこいビルマ文字を作りました。ビルマ語の声調は下降調、低平調、高平調の三種あり、二種の声調記号と、声調符号を兼ねた母音字で表します。ヤカイン州のヤカイン(アラカン)人はビルマ語に近いヤカイン語を話し、十八世紀末まで独立の王国を維持していました。

東アジア・東南アジア諸語の中でも、ベトナム語およびそれと近縁のムオン語を除く南亜語族 Austroasian と、チャム語の後裔である回輝語を除く南島語族 Austronesianは、声調言語ではなく、単音節言語でもありません。

その他に、ナイジェリアで話されているボルタ・ニジェール語群のヨルバ語、イボ族、エウエ語を始めとするいわゆるニジェール・コンゴ語族の主な言語（スワヒリ語を除く）、それにハウサ語が声調言語とされ、声調が語彙弁別の役割を果たしていますが、いずれも複音節で一音節中での音高の変化はなく、上述のような単音節声調言語とは趣きが違います。また、これらと日本語やスウェーデン語の音高アクセントとの違いも明確でない所があります。

インド・アリア諸語の一つパンジャブ語では、有声帯気音の系列（gh jh ḍh ṛh dh bh）が消滅して語頭で無声無気音・語頭以外で有声無気音に変化し、その代償として声調が発達しているそうです。h も語頭以外では、少数の例外を除いて消滅し、やはり声調に痕跡を残しています。一般に、語頭に有声帯気音があった場合は低い声調になり、それ以外の箇所では先行する音節が高い声調になっています。ここでも、音類の合併で失われた弁別機能を声調の獲得で補償しています。

まとめると、現在声調を有する言語は、かつてはより複雑な音節をもっていたが、時間の経過とともに、主音節の頭子音の清濁が失われたり、複子音が単純化したり、語尾の母音が脱落したり、第一音節が脱落したりして、音節が簡略になるとともに、その代償として、声調という音高アクセントが生まれまたは複雑化してきたと言えます。音節が簡単になると同音語が増えて弁別が難しくなるからです。このような補償現象は他にも言語のいろんな面で見られます。それも、声調がゼロから生まれたのではなく、濁音の音高が清音より低くなるなどという元々の傾向が意識され増幅されていったものと考えられます。